

ポナペ気象台訪問記*

藤谷 徳之助**

昭和62年11月から12月にかけて東海大学海洋学部の望星丸二世に乗船し、熱帯海域において気象観測を実施した。この観測の目的は、熱帯域における大気-海洋相互作用を明らかにすることであり、科学技術庁の予算で実施されたものである（観測の詳しい内容については別の機会に報告する）。

我々気象観測グループ（気象研究所2名、気象庁1名、気象協会3名）は、東カロリン諸島のポナペ島で乗下船したが、帰路多少時間があつたので、熱帯気象学の方野では有名なポナペ気象台を訪問した。ポナペ気象台の高層観測データは有名ではあるが、現地を訪れた方は余りおられないと思われるので、ポナペ気象台について簡単に紹介する。

ポナペ島（Ponape Is.：現在の正式名称はポンペイ島 Pohnpei Is.）は東カロリン諸島の1つで、7°N、158°Eの太平洋上に位置している。第2次世界大戦前は日本の信託統治領で、戦後はアメリカの国連信託統治領になっていたが、現在は、ヤップ島（Yap Is.）・トラック島（Truk Is.）・コスラエ島（Kosrae Is.）と共にミクロネシア連邦（Federated States of Micronesia）という自治政府を形成しており、ポナペ島のコロニア（Kolonía）は連邦の首都になっている。島の人口は約2万人である。火山活動とサンゴ礁で出来た島で、面積は約334 km²（淡路島の約半分の大きさ）、最高峰は772 mもある。海上から見ていると、地形による上昇気流によって島の上だけに雲が発生し、雨が降っている様子が良くわかる。例えば1986年の年間降水量は4,408 mmにも達している。

ポナペ島へは、グアムからコンチネンタル航空が週4便就航しており、トラック経由で約3時間かかる。我々がグアムからポナペへ向かう時には、ちょうどITCZの付近を飛行することになり、層状雲・積雲・積乱雲な

ど色々な状態の雲を見ることが出来、大変興味深かった。

ポナペ気象台（Weather Service Office）はコロニアの中心部にあり、U.S. National Weather Serviceの手によって運営されている。この観測所の所長 Suzuki 氏（ポナペ人と日本人の混血であるが、日本語は全くしゃべれない）は、我々の突然の訪問にもかかわらず、親切に色々説明して下さった。この観測所の所員は6名で、午前7時から深夜24時まで1日17時間活動しており、地上気象観測と1日1回00Z（local time 11時）の高層気象観測を実施している。観測室は木造平屋建であるが、気球充填室はブロック造で屋上にゾンデ追跡用のアンテナが設置されている（写真1参照）。露場も広々としており芝生がきれいに手入れされている（写真2参照）。室内の気象機器は比較的近代化されており、テレックスなども完備していた（写真3参照）。また水素発生装置も設置されている。観測室の建物は1988年6月には現在の建物の横に建設中のブロック造の建屋に移転し、地上気象観測装置も1988年4月には新しい装置に更新されるということであった。我々はちょうど高層観測の時間を見計らって訪問したので、ゾンデの地上でのチェックから飛揚まで、全て見学することが出来た（写真4参照）。この観測所のデータは、通信衛星経由でハワイのヒッカム空軍基地に送られている。しかし、ファックス装置が設備されていないため、天気図は送られてこず、グアムからテレックスで指示報が送られてきていた。

また Suzuki 氏は、ハワイ大学の高橋教授（現在九州大学）が約2か月滞在されて thunderstorm の観測をされたことや、日本から名大空電研の竹内教授らが観測に来られたことなどを話されていた。さらに、約1年程前からコロラド大学の環境科学研究所のグループがコロニアの郊外にウィンドプロファイラーを設置して、上層風の観測を実施しているということであった。現在はコンピュータの故障で観測を中止しているということであ

* Visit to Ponape Weather Service Office.

** Tokunosuke Fujitani, 気象研究所物理気象研究部.

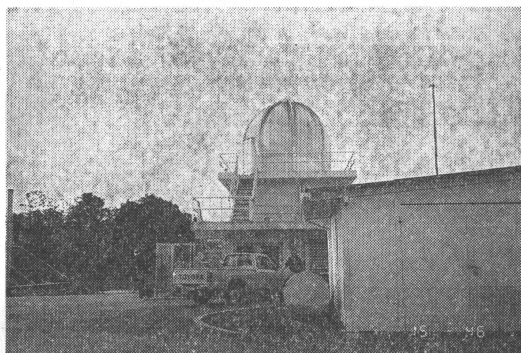


写真1 ポナペ気象台の建物

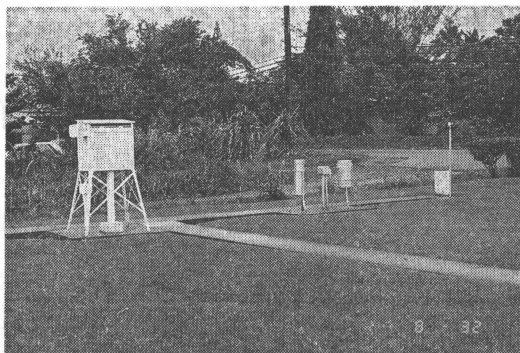


写真2 ポナペ気象台の露場

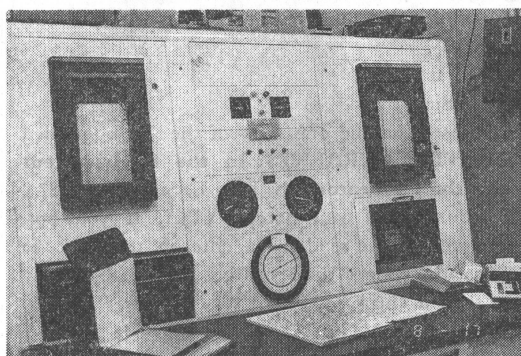


写真3 地上気象観測装置

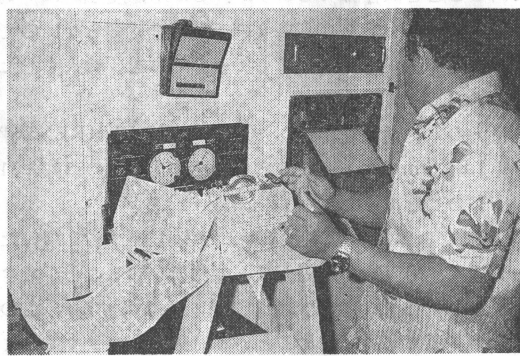


写真4 飛揚前にゾンデをチェックする気象台職員



写真5 コロニアのメインストリート

り、時間も限られていたので今回は訪問しなかった。
ポナペ島が戦前日本の信託統治領であったことから、

コロニアの町には日本人や日系二世も多く、現地の人でも年寄りの方は日本語をまだ覚えていた。また市内には日本軍の戦車なども道端にそのまま展示されていた。町の中心部には色々な施設が一応はあるが、近代化はまだまだという感じである(写真5参照)。ホテルなどの設備も結構整ってはいるが、国際電話などは支払口座の番号がないとかけられないため、支配人がいないとかけられなかったりするという不便さはある。島の南部にはナン・マドールという有名な遺跡があるが、ポナペ島自身はまだ観光地としては整備されていない、それがまたこの島の魅力にもなっている。

今回ポナペ気象台を訪問して、文献の上でしか知らなかった観測所を実際にこの目で見る事が出来、僻地で観測に従事されている人々の苦勞が感じられ、改めて気象事業における観測の重要性が痛感された。